

# 新田で30年ぶりに 総事で葺き替え

特定非営利活動法人 新田むらづくり運営委員会 [鳥取県智頭町]

テーマ

## 新たな‘結い’による 茅葺民家保全と地域活性化の試み

設立年月 2000年12月

メンバー数 17人

代表者名 岡田 功

連絡先

〒689-1402

鳥取県八頭郡智頭町智頭2072-1

智頭町役場 企画課内

岡田 光弘

tel 0858-75-4112

fax 0858-75-1193

e-mail okada@town.chizu.tottori.jp

URL <http://www2u.biglobe.ne.jp/~SHINDEN/>

わたしたちについて

村の人口流出・高齢化が進む中、何とか活力を取り戻そうと、集落全戸が参加して立ち上げたNPOです。伝統芸能人形浄瑠璃の保存、交流活動の推進を目的に、定住型宿泊施設や飲食施設の運営を行っています。

### 活動に至った理由や背景

鳥取県智頭町は、鳥取砂丘を形成する千代川の源流域に位置し、周囲を千メートル級の山々に囲まれた静かな町。活動の舞台、私たちの新田集落は、その智頭町の中で最も標高が高い、千代川の最源流部に位置する戸数17、人口50人の小さな村です。

新田集落は、江戸中期正保4年(1647年)の開村以来、三百数十年の歳月をかけて開墾されてきた棚田の広がりとともに、かつては、点在する茅葺民家が‘日本人の原風景’とも言える里山景観を形成していました。しかし、その景観の大きな要素であった茅葺民家は、時代の変化とともに次々に建て替わり、あるいは鉄板葺き屋根への改装が行われ、現在ではわずか1棟を残すのみとなってしまいました。

この唯一現存する茅葺民家は明治7年(1874年)に建てられたもので、後年の改装が少なく、建設当時の姿を比較的よく残した建物です。平成2年(1990年)に空き家となり、年を追うごとに傷みが進行していましたが、平成16年(2004年)頃から少しづつ修復を始めました。修復にかかわったのは、主には地元鳥取大学や鳥取環境大学の学生たち。NPO法人学生人材バンクで活動する学生たちです。月1回、廃墟に近かったこの家に集まり、多量のゴミの片付け、大工作業、塗装作業などを続けてきました。

6年かかつてようやく人が集まる状態にまで修復し、村の迎賓館的な役割を持つようになりましたが、問題は茅屋根。傷みの進んだ屋根は激しく雨が漏り、雨が降るたびバケツを並べなければなりません。

何とかできないか…。しかし、村人の6割が70歳以上となつた今、昔のように村の総事で葺き替えるなんてとてもできない…。でも景観を守るため、茅屋根を残したい…。

集落の全戸で構成しているNPOの若手メンバーが中心となり、集落だけでなく学生人材バンクをはじめとした若者たちによる新たな‘結い’によって茅葺きに挑戦しよう!

同時に集落を活気づかせるきっかけにできないか…というのが今回の活動です。



## ○前置き…

新田集落が全国で初となる集落型NPOを立ち上げるに至ったのは、1991年(平成3年)、鳥取県の仲介によって始まった大阪いずみ市民生協(組合員数413,000世帯、本部：堺市)との交流事業がきっかけとなっています。

都市住民との交流活動を重ねるうち、当時から兆しのあった集落の人口減少と高齢化、自治力の低下などの打開を探るため、NPOの前身となる「新田集落振興協議会」を結成し、飲食や宿泊施設の開設を中心とした集落活性化計画を立てきました。

そうして20年。伝統芸能である人形浄瑠璃(新田集落では村人全員が人形を操れるのです!)の上演施設、飲食施設、農園付ロッジなどの整備を一歩ずつ実現し、これらを運営するNPOも設立してきたのですが…。これらの活動の中心だった人たちも今は全員70歳を超え、少し疲れが出てきたのも事実です。

…でも、この20年間に撒いた種は、少しずつ芽を出し始めているようです。今、村の3棟の農園付ロッジには、3組の若い家族が移住し、暮しています。そして、この活動の舞台である茅葺民家には、生協の担当者として村に通っていたT氏が移り住んでいます。今回の活動は、こういった若手・新顔の村人が中心となって行っています。



新田集落に唯一残る茅葺民家。  
2011年7月末、茅葺屋根が30年ぶりの  
総事によって再生しました。



1999年夏。ほんの10年少し前の新田集落。茅葺民家がまだあちこちにありました。「正しい日本の農村!」って風景です。



冬の新田集落。積雪が1メートルを超えることも…。茅の葺き方は地方や職人によって実にさまざま。この雪に負けない屋根を葺ける職人さんを探していました。

#### ○準備 (2010年～2011年3月)

茅葺屋根の葺き替えで最も大きな準備は、職人を確保することです。

現在、智頭町内で‘現役’の茅葺民家はわずか6棟を残すのみで、茅葺職人はすでに一人もいません。そのため、これら‘現役’民家の屋根補修・葺き替えには通例では隣接する岡山県に在住する職人に依頼しています。しかし、雪の少ない岡山県ではなく、鳥取県の豪雪に耐えられる茅屋根を葺ける職人を探していたところ、智頭町にほど近い八頭町に2人(親子)居ることが判明しました。2010年4月からこの職人さんと打合せを開始し、葺き替える範囲、作業時期、材料調達などの検討を重ねました。

次に大きな準備は、材料である茅の確保です。

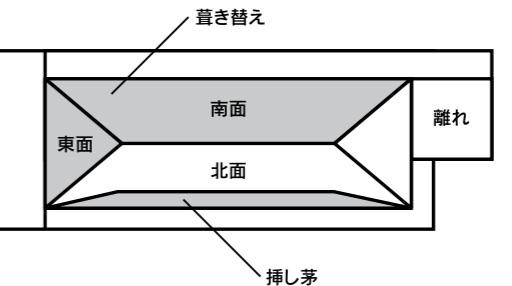
職人を通じて岡山県吉備高原から約200束、鳥取環境大学の卒業生で茅葺民家の研究を行っているグループから約100束、購入できる見通しとなりました。

もともとこの茅葺民家の屋根裏等に蓄えられていた茅が約100束、近隣で取り壊される民家から譲渡された茅が約100束、これら全部を合わせて約500束程度を確保することが可能となり、葺き替え作業に入れる見通しができました。

また、葺き替えに使う細竹を200本程度準備しておく必要があり、この細竹の切り出しは2011年3月に、集落作業で行いました(後に200本では足りず、さらに100本が必要となりました)。

#### ○葺き替え (2011年4月30日～7月6日)

調達できる材料だけでは屋根全部を葺き替えることは難しいことから、葺き替えは傷みの激しい南面、東面の2面だけとし、軒の傷みがある北面は補修(挿し茅といいます)で対応することとしました。作業は前半(4月30日～5月8日)、後半(6月19日～7月6日)に分けて行いました。



#### <前半>

傷んだ茅を剥す・茅を運ぶ・足場を運ぶ、など人手を必要とする作業をゴールデンウィークに合わせました。学生人材バンクの若者・集落の住民をはじめ、連日、さまざまな人たちが応援に入ります。私たちはこれを‘総事(ソウゴト)’と呼びます。‘ワークショップ’という言葉もありますが、しつくりません。

初日、40年以上経過し、半ば堆肥化していた南面の屋根は、わずか3時間できれいに剥されました。剥した茅のうち傷みが少いものは、再利用するため束ねておきます。初日の昼からは、早くも軒部分からの葺き上げが始まりました。

屋根裏の茅を運び出す・茅を屋根に担ぎ上げる・葺く・竹で押さえ針金で締め上げる・足場を固定する。この作業が5月8日まで延々継ぎました。一日終われば鼻の中まで煤で真っ黒! 作業が終わって屋根にシートを掛けておいたのに、夜中に大雨が降って家のなかが水浸し! なんてこともあります。



南面の茅を取り除きました。この屋根裏に陽が差し込むのは、39年ぶりだそうです。

○活動を通じて…

私たちはかつて都会に出て行った村人がUターンで戻ったり、若い世代の人たちが移り住んだり、あるいはさまざまな立場の人たちが集落に関わるようなことが、もっともっと活発になることを望んでいます。しかし、そのことを進める上で、外部の人たちが求めるものと、それに対して私たちが考えるものとの間には大きな感覚のズレがあるのも事実です。都会と農村では生活環境が大きく異なりますので、当然、モノサシが違つて当たり前ではあるのですが…

ただ、私たち自身がその「モノサシの違い」というものを自覚していかなければ、私たちが運営する施設も、取り組みも、的外れなものになりかねない危うさを伴います。たとえば私たちの集落にも立派な交流施設が設置されていますが、本当に交流機能を果たせるものであるかというと、決してそうではありません。逆に、私たちにとってはごく当たり前なものに対し、都会の人が大きく感動する、ということもたくさんあります。その意味では、都会から移り住んだ者や若い世代には、モノサシとモノサシを橋渡しする、いわば「通訳」としての役割があります。

今回の取り組みは、都会から移り住んだ者と若い世代が「こんなふうに使ったら絶対に楽しいよね」と、新しい感覚で自らが楽しみながら少しづつ手を入れているからこそ、この建物が多くの人々の集まる場所に変化しつつあるのだということ、また、それが公的な施設ではないがゆえにそういう活動が保証されるのだということを、再確認させるものになったと感じます。



新しい茅を積み、押さえの竹を槌で叩いて締め上げていきます。高所恐怖症でなくともかなり緊張を強いられる作業です。



上／茅運びにはまってしまった山ガール、智頭町役場に勤務しています。職人の親方から弟子入りを強く勧められ、本当に転職を考えたらしい…  
下／蒸し暑い梅雨空の下、職人のはさみ作業が続きます。簡単に刈り込んでいるように見えるのですが…



<後半>

例年になく早い梅雨入りのため、一ヶ月半の中斷を余儀なくされ、後半作業は6月19日から始まりました。後半作業は茅の切り揃え(ハサミ作業)を中心となるため、職人作業が多くなりました。

葺き替えの大詰めを迎えた7月2日。この日は片付けのための総事を行いました。おびただしい量の茅くずを屋根の庇から落とし、ひたすら家の畑に運びます。畑に積まれた茅くずは、さらに村の人たちの畑に運ばれていきました。

私たちが最終的に購入できた茅は323束。北面の補修途中で材料が尽きてしまい、7月6日、葺き替え作業はすべて終了しました。

<周辺作業>

屋根が葺き替えられて綺麗になってくると、庇などの傷みが気になってきます。

家、そして並んで建っている蔵の庇(トタン)の傷みが激しく、また、離れの瓦屋根も風化していることから、これらもあわせて補修・塗装等を行うこととし、茅の葺き替え終了を待って作業を始めました。トタンの傷んだ部分を切断し、新しいトタンと交換する作業と、セメント瓦への塗装を行いました。夏空のもと、焼けた屋根の上の作業は形容しづらいものがありました。

7月6、9、18日の3日間でこの周辺作業を行い、屋根の葺き替えはすべて終了。

村の迎賓館的役割を持ち、たくさんの人々が集う茅葺民家。これからは雨の日も安心して来訪者を迎えることができるようになりました。



炊き出しに来てくださった皆さん。若い男女の出逢いを応援しようとがんばっている人たちです。茅葺体験も出逢いの場にしようとしたのですが…残念！若い女性があまり集まりませんでした。



離れた屋根を塗装しているY君。一昨年、郷里の福井県から鳥取に舞い戻ってきました。学生時代、この家に出入りし、たくさん飲んだり食ったりしました。お礼奉公を兼ねて、今回、学生人材バンクとの調整役を買って出ました。

## 今後の予定

築約140年。廃屋同然だったこの茅葺民家の修復を始めたのが平成16年（2004年）。どうしても素人の手に負えない床の張り替え、台所・トイレ・風呂といった水周りの改装は本職の方にお願いしながら、人が住める・人が満足して集まる状態まで修復してきました。そして、最後に残った大きな課題。それが茅葺屋根の葺き替えでした。

以前は村の総事（結い）で行われていた茅の葺き替えも、新田集落で最後に行われたのはもう30年以上のこと。その経験すらない村の若手や移住してきた者たちで葺き替えに挑戦するのは、けっこう大変な取り組みでした。材料は何をどれ位準備しなければならないのか、人手はどのタイミングで何人位必要とするのか、そもそも作業の工程はどんなふうに進むのか…等々、手探り状態の連続でした。アクシデントもたくさんありました。屋根の茅を剥した夜に土砂降りの雨が降り、家中水浸しになったり、殺虫のため川に浸けていた100本の細竹が増水のため全部流されたり、ずいぶん虚脱感に襲われる経験をしました。

そもそも茅葺屋根を葺き替えるにあたり、私達は大きな勘違いをしていました。

茅葺作業のイメージとして、例えば合掌造りの葺き替えの光景があります。非常におおぜいの人たちが屋根に取り付く、次から次へと茅を運び上げるイメージ。このイメージがいろいろと影響しました。茅を葺きあげていく時期におおぜいの人の参加を充てていたのですが、職人さんが2人しかいないので、たくさん集まつても次から次へ茅を運び上げる必要など全くなかったのです。

村の長老たちが「そうそう、昔もこげえなように、よーけ人が集まつても手持ち無沙汰で、屋根の下からあれこれ口だけは動かしとつたのう」…と平然と言います。

もっと早く、打合せの時に教えて欲しかった…。分散して作業体制を組む事だっていくらでもできたのに…。

まあしかし、今回の葺き替えは屋根の半分。今回は葺き替えなかつた西側と北側の面も、あと数年内には葺き替える必要が出てきます。その時には今回の経験を生かして、もう少しスマースに葺き替えることができるでしょう。



2012年3月末、村の新年度総会です。  
NPOの総会も同時に行います。

この一年、3家族が村に移り住みました。  
この村では今も皆で人形淨瑠璃を演じます。  
江戸から明治へ…。それまでの価値観が否定された魔仏毀釈の時代。この村でも人心が乱れ、博打が横行。一夜で田畠を失う者まで出ました。これに心を痛めた一人の青年が、悩んだ末に立ち上ります。目を付けたのは淨瑠璃。皆が協力して息を合わせなければ人形を操れない…。淨瑠璃は当時、流行の最先端。ハイセンスで超おしゃれ。これだ！と決意した青年。私財を投じて数体の人形を購入、明治7年、一座を結成したのです。

ここぞという時には息を合わせる…  
この村にはそんな空気が今も脈々と伝わっているように思います。

新田集落には3棟の農園付ロッジがあり、NPOの事業として運営しています。

葺き替えを始めた4月、新婚カップルがこのロッジに移住してきました。移住してきたのは平成16～17年頃にこの茅葺民家によく出入りしていた東京都出身の元鳥取大生のH君です。地元智頭農林高校の教員となって新田集落にやってきました。村人の田んぼを借りて自然農法で米作りに挑戦したり、鶏を飼ったり、とても楽しそうです。

今年（平成24年）2月、第1子が誕生しました。そのH君の同級生だったY君。おととし福井県から鳥取県に移住し、現在、智頭町社会福祉協議会の職員として活躍しています。今回、主に学生人材バンクとの調整係として重要な役割を担いました。

さらに、葺き替えが始まる2ヶ月前、まだ若い家族が兵庫

県からこの村に移住してきました。奥さんは、現在、集落の飲食事業で提供する新商品の開発に挑戦しています。移住して一年が経過し、この村に家を建てる決意を固め、用地を確保しました。

新しい風が、この再生した茅葺民家を地域の交流拠点として、またさらに新しい風を呼び込む。それを集落の土着の（？）人たちが一緒になって楽しむ、そういう活動を引き続き作り出していくたいと考えています。